

スアンプルー・スラム火災に関する近況報告 (No. 1)

はじめに

4月23日(金)に発生したバンコク、サトーン区のスアンプルー・スラムの大火災から、一ヶ月あまりが経過した。この間、住民たちは臨時の避難所だった近くの工業大学を追われ、焼け出された約1500家族余りのうち95家族が近くのサッカー場でテント生活を、また約150家族(101世帯)が元いた場所で焼け残った家屋に、そして残りの約1250家族が親戚の家や別の場所を借りるなどして暮らしている。SVAは、緊急・復興支援に関連して、様々な関係者と日々調整業務にあたっているが、以下に近況について簡単に報告する。

1. 被災住民の近況と復興まちづくり計画



サッカー場に作られた仮設テント

上述したとおり、スアンプルー・スラムの被災住民は、現在、四散した場所での生活を強いられ、住民委員会関係者や行き場のない貧困家庭などの被災者95家族(約350人)が、付近のサッカー場に仮設テントを立て、厳しい生活を送っている。住民委員会や、主だったリーダー格の人々は、この仮設テントを事務所代わりに使用しており、行政等の関係者の窓口になっている。現在のところ、仮設テントでは食糧や衣料、水、電気などは何とか確保できており、トイレ、台所、水浴び場も、臨時の

もので急場を凌いでいる。仮設テントの水道代と電気代は、今のところ区が負担しているが、避難生活が長期化すれば、誰が負担するかで問題になりそうな状況である。

住宅再建問題については、住民たちは、貯蓄組合を作ってそこに政府から融資を受ける形で独自の分譲住宅の再建(土地は長期で借地)を計りたいとするグループ(約300世帯)と、無償で集合アパートを政府に建設してもらい、それを借りる形態を好むグループ(推定約100~300世帯)とに二分されている。前者のグループは、今後政府から法律に基づいて一世帯につき3万バーツ程度の保障金が支給されることから、そのお金の大部分を頭金に住宅再建できないかと模索しており、スラム住民ネットワーク組織、NGO、CODI(社会開発・人間の安全保障省の一機関で Community Organization Development Institute)などが支援・協力している。一方、後者はそうした意見には消極的で、政府任せ、もしくはどちらでもいい住民が中心で、住民委員会のメンバーのほとんどが後者を支持している。

こうした中、5月26日夕方、土地所有者である財務省の金融公庫副局長、社会開発・人間の安全保障省の住宅公社(NHA, National Housing Authority)関係者(前出のCODIとは別の機関で、

主に公団アパートを建設する機関)、国会議員関係者、区役所などと、住民2派との協議が急遽行われた。政府側としては、土地が狭いことを大きな理由に、1世帯3万パーツの個人保障は取りやめ、それも含めた予算で5階建ての集合アパートを20棟ほど敷地内に建設し、家賃を月額900パーツ程度に抑えて16ヶ月以内に完成させること、また保育園と図書館は集合アパートとは別途土地を同じ敷地内に確保し、再建をする(SVA=SAFと協力するという意味だと推察される)案を提示。これに対して、SVAも含め、NGOなどが奨励している、貯蓄組合を通してそこに政府からの融資を受ける形で独自の分譲住宅の再建(土地は長期で借地)を計り、その中で保育園や図書館も再建したいとするグループが猛反発し、集合アパート建設ではなく、分譲住宅案を再提示した。反対の理由は、集合アパートの場合、借家権の売買が激しくなったり、住民間のまとまりがなくなってコミュニティが維持しにくくなること、また、商売がやりにくくなること、家賃を払い続けなければならない、何十年経っても自分の持ち家にはならないことなどを挙げている。

現段階では何ともいえないが、このままだと集合アパートの建設計画が有利に進みそうな展開。ただ、持ち家があった住民と、長期、短期で借りて住んでいた住民の借家権を含む居住権の問題や、これから1年余りの期間を住民はどこで過ごすのか、仮設住宅はどこに建設するのかなど、細かい詰めが全くなされていないことから、さらなる協議が度々開かれることになると予想される。

2. 図書館と保育園活動の近況

火災から約一週間後に、避難所になった工業大学の競技場に敷設した建物を借りて保育園が再開された。現在、登録していた241名中、150人ほどが戻ってきており、SVAからも学用品や食料などを一部支援している。しかし、ここも、5月一杯で明け渡さなければならない、隣の障害児学校の一部を6月から8月末まで借りて運営していく予定である。今のところ、8月以降の目処はたっておらず、別の場所



避難所の保育園で実施されている移動図書館活動

を借りるか、または近く場所を確保して仮設の保育園を建設する予定である。子どもたちの中には、未だに火災の恐怖が消えない子たちもおり、先生たちが励ましている。

図書館の再建も未だ目処がたっていない。今のところは移動図書館活動などでカバーしているが、保育園と併設する形で今後の運営形態を検討中。長期再建方法についても、元いた場所の復興計画が固まり、場所が確保され次第、同じ敷地内に併設する形で再建していく考えである。

3. 奨学金・見舞金関係

4月26日、SVAのスタッフや保育園関係者10名に会長から見舞金を手渡した。また、火災から

10日余りたった5月4日に、こども、高齢者、障害者300名を対象に見舞金と緊急奨学金を支給した。この他、毎年、通常支給している奨学金と特別奨学金を、小学生～大学生34名に対して5月11日に支給した。また、衣類その他の救援物資については、避難所において支給した。

4. 復興支援に関する今後の予定

前述したとおり、長期的な問題としての最大の焦点は、今後の復興まちづくり計画がどのような形になるのかという点である。この計画案が固まり次第、それに合わせて住民や政府関係機関と調整を行ない、保育園と図書館の再建についても着手していくつもりである。また、その際は、保育園と図書館、あるいはコミュニティセンターなどの機能を同じ敷地内に集約させ、コミュニティづくりの一端を担えるよう協力していきたいと考えている。

また、復興計画が固まるまで、また、固まってから完了するまでの中期的な復興支援については、仮設住宅への支援や、仮設保育園、仮設図書館等に対する協力が必要になるものと予想される。期間的には恐らく1年半ぐらいは最低でもかかる可能性があると予想され、その間の支援策を練る必要がある。ただ、これについても長期復興計画案の中身次第で変わってくる可能性もあることから、SVAとしては中長期双方の計画案の進捗状況に合わせて、臨機応変に対応していきたい。

余談だが、タイでは今年8月末に都知事選が、来年初めには下院議員の総選挙が実施される。こうした政治的な状況も、今後のスアンブルー・スラムの再建計画に影響してくることが外部要因として挙げられる。

以上